播州名所巡覧図絵

三

ル 4
3541
3

文榮堂

3541
3

播磨名所巡覽圖會卷之三目錄

土山
安養寺
辛堂 開山堂
教信上人影 德樓
具平親王塚
二塚祠
中津村惣跡
五社大明神
天滿宮
長德寺
松尾寺
砂子大明神
慈眼寺
新在家古墳
地口古城跡
下居清水
常樂寺
妙見大明神
加古驛 加古松 加古濱 加古渡
觀音寺
假寢岡
福里村代神樂
麥丘村御古墳跡
高祥寺
摩耶寺
平野村殺生僧
日岡大明神社
崇神天皇陵
天滿宮
二見浦
德源寺
住吉祠
住吉岡
住吉明神社
高畑村
教信寺
泉式部塔
古子岩
七騎塚
常住寺

昭和十六年一月十一日寄贈
尼野貴英氏

[illegible]松

法〻寺瀧　宝蔵寺　牛臥天王　園長寺

尾上天満宮　印南浦　天満宮

尾上松　往古明神河　行基松　太原太明神　古蹟　石瓜

養田社　博宮　今津川　大川

高砂　多砂泊　高浜　大海　太神崎　本神崎　敦盛

荒井　荒井神社　高砂神社　本殿　幾殿　神明　新宮　古神宮　秋葉　金毘羅

稲荷　未社　厨嬰社　松生松　往古　八幡　戒社二基

十輪寺　本堂　観音堂　不動堂　薬師堂　閻魔堂　護摩堂　月西上人四跡　天竺徳兵衛屋敷　鶴林寺　多砂城址

本尊　多聞天　毘沙門　天神　宝蔵

多賀社十二社　三社神　稲荷社　鏡堂　経蔵　南仏牌石　護塚　山王権現

池大明神　高国寺　印南郡

常光寺　常願寺　八幡宮　石寺古城

稲名寺　龍泉寺　赤松政村墓　加古川

加古川城址　泊大明神

弁財天社　本村城跡　金剛寺　福田寺

米田村　八十石陛　八十河原　佐伯寺古跡

石瓜　腰掛岩　鞍馬寺跡　毘沙門岩

神告場跡　真名井　石井清水

妙見大明神　生石明神　生石明神参詣　石宝殿

神氏村　龍山石　石瓜　阿弥陀寺村

乙濃井戸　生石明神　乙濃井戸　白矢薬師　時光寺

大日寺　蓮養寺　六勝武者塚　佛心寺

蓮養寺　神塚　久輪橋　加茂明神社

滿の井　高砂石　曽根天満宮　梅乃井

圓通寺　岩　往古河　曽根松　蓮教寺

　　松笠山　松笠浦

大塩 天神河 寺三ケ寺　的形 神河三基 寺院三ケ寺　揖岩　的形天満宮

海岳寺　大華河　八家地蔵　神武天皇 帯武

都深井　七社稚児　穀恩寺　赤松上総介墓　赤松天満 澄笑石 若一王子稚児河

土敷葦　安楽寺　観音寺　天神山城　園福寺

赤松浅海墓

大澤清水　八幡宮　助永池中橋　高御産山

大谷村　長楽寺　鷲巣山　唐の櫛村　志吹河

法華山一乗寺　紀伊 紀天 妙見 毘沙門 淀王 三層塔 鐃樓　唐の櫛村　志吹河

岩谷 御執金 倫蔵 奥院 法道仙人廟 東止堀石

播磨名所巡覧圖會卷之三

土山

海辺にて加古郡 海辺の西 社浜村の

慈眼寺

海辺の西 社浜村の

遍照山高泉寺

日村 又名 土山 西

高畑村

ゆり畑村に名醫あり淫病と称す 奥義を一日西海諸国より集る

雲生山安養寺

一名村 又名

新在家古墳

傳へ云ふ相模と呼ぶ人の古墳なり 慶長八年に慶安元年に利左馬助義氏の墓なり 三云

郷人云後深草院

摸尼山摸尼寺

彩色 本尊観世音

開基法道仙人云ふ五十八代小松天皇の御祈願所寛平法皇 潜居なり 伽藍経

堂数十の坊舎あり 又岳史云ふ今一寺一坊観音地蔵の二像華田の開

伽藍あり 観音の霊記に云ふ 一名摸尼の観音云

念佛山教信寺法泉院

教信上人の元亨釋書及び往生十因に

ふ 凡俗の中に仏書を結集し金く清浄蓮園の為僧と清和帝

の御宇に封境廣大にして僧院八十餘坊あり寺領八百石と佛供料

三ヶ貫と称し其後兵火に罹り田畠に及ぶ又崇徳院の御宇に又百石

を場る國中の人民此道場に集り念佛修行怠る事なし 後深

草院の御宇三百石と場り此時浄土宗西山流義と称し毎年八月

念佛山 教信寺

開基教信上人寺号阿弥陀如来開山
聖人教信上人の御着
と妻尼ハ盤嶽あひて
御着の寺流と曰く
教信上人ハ人皇
四十九代光仁帝
乃至子御年十七
の時南都真福寺
を捨ひて出家し
夫より諸法を修
遍し遍と称
加古郡印南の地に
て停め念佛三昧を

八〇貞観八年
八月十五日
遷化ハ

九日より十八日まで一七ヶ日の同念佛の勤行絶ずして末流又十余寺出勤ありとゝむ　しゝ諸堂厳重にうしゝ　ゞ度々の兵火にうつりて已滅し

今本堂開山聖親書堂僧樓教信上人住僧と迷きり

野に古城址　日本長年に即元寇門尉の居城之別名長浜の城ゝ　天正十一年秀吉長浜城を攻落と　平野村数心僧　西行撰集抄に中比摂津国平野に侍りける法師ありてゆゑ心の因縁ありてかたうらうらに海に向ひてかたうらうらに海に向ひてかたうらうらに海に向ひ

ことは記されいまに和泉国の人婦石とゝ小武郎とりくしらるゝ玉云
を以て又後冥入故冥のこゝろを以て性寛上人のりくよりて老〜ろとしを
む上人いまゞ書写し移らざる者なるべし又武郎が生涯と日記家集など
も考へ合ふ和泉国なるとてられくようるるの御筆教通親卿を通ひ給へ親
失給ひく保昌が妻ゝ有り保昌卒し石ゝ有り一条小白川撫教寺に住る
滋心院小御堂ゝ法花とゝひ年を経て三月廿一日又世と去る
本像法華経を撫教寺に住ける撫教寺に住ける小武郎が内侍をとゝ
完達て記せ〜り家集に詳なり播州の人佛書ゝ〜〜〜

異平親王墓

俗二年親王ゝ住ける所ゝ通ゝ三條坊門ゝ西ゝ堀ゝ東ゝ打上天ゝ原
及び浪速医師諸君墓ゝ通ひ真字体勝物流新撰六帖弘決外典抄とゝ
右石塔の下ゝ有ゝ細田の話ゝ云ひ伝ゝ有り

下居清水

正一位日図大明神社

又日図明神ゝ氷図ゝ云大社村
ゝ有ゝ又氷図ゝ
明和元年大社村狗屋ゝ次云湯河原村西田道新溝ゝ口村大村友新力と合て
再造〜今の社先ゝ毎年九月初午の日祭祀ゝ有り郷中隔年ゝ動む三月
八月初午の日既ゝ有り郷の飲酒と煙と又正月初午の日大阪ゝ有り是ハゆ来
郷刀祢と称して奮起三十六人の図ゝ勧むて各六位ゝ成て明神の供奉職
ゝ又正月廿六の日より已の日まで七日の間ゝ已龍の祀ゝ物者曲を

傳止て下女下男ゝ右郷ゝ久〜大ハ他郷ゝ嫁ぎ給ハ氷図山ゝ放ち家の戸
渡ゝ水溝ゝ池ゝ取ゝ茶柄杓の類ゝ是ハ茶ゝ葉ゝ縁ひ言伝ハ耳ゝ残て毒ゝ
出ゝ代ゝ法治ゝ多くまゝ忌ちゝて厳重ゝ守ゝ一国の例ゝ云濁ゝ
別当神ゝ田中の松石の神盟ゝ一の名居ゝ出仕ゝ居ゝ者ゝ俗ゝ御ゝ放〜と
つかくて捷捷と期として忌を脱ゝ祭ゝ午の日ゝ平明ゝ云ひて村ゝ刀祢ゝ
狩ゝ此外ゝ節の式ゝ悪く刀祢の役ゝ忌籠の間ゝ紅阪講ゝ云ふ有りて講
中池田の渡ゝ出く祓禊〜始りて神楽を奏ゝ者ゝ社勢の神楽ゝ云刀祢
の一族ゝ〜〜〜明神の神ゝ出ゝ今ゝ家絶ゝ〜〜〜刀祢ゝ物の阪の
武ゝ七月の忌籠ゝ神の生ゝ浮ゝ方ゝ〜〜〜
大社村の下加右の渡〜の上ゝ有りて
の名ゝ有ゝ

右ゝ岩

二塚祠

二塚村ゝ有り

祭神稲飯命ゝ〜て氷図五瀬命の弟ゝ

安生山常楽寺

大社村○岩神天竺陵

七崎塚

加右の渡の西ゝ有り

七蹄堀

陸奥刑部丞の臣乃舟
六郎を臣をそしり
其蒙七騎家の戦死
七る臣へ雲州へ
逃さそう
しむ

中津村城趾　鎌倉権五郎景政の末裔長尾の末裔掘兼十郎俗門入道を居城すと
天正中　徳川武部良政之加勢して討死と
溝に村のあり　天満宮　豊津村
祝職兼とする　寺家村
妙見大明神　寺家村
薬王山常住寺　五社大明神　寺家村
加古釋尊　加古の松　人馬大久保の跡より　家久後で所長の跡より

加古郡之屬　加古川村印南郡之屬　二郡家つきの釋之

松原いそこしもえんぴ攝州海の内のとりむまやい寄よりして　末文抽言

附記

右平記之新田義貞の廟所ハ西國へ下り給ふ後陣の勢を結個（んみ小橋ノ國加古川之北又日區尚のなる其勢都合二万余騎之如りて赤松ぐ撃へ寄ひ（きして洲崎の宿を押寄給ふ

此時は加古の松樹繁々せいさうかくして加古の渡

加古島　此海い今みなかつ比大古小るとき海の内へ迎く個きりて海い今のこもり西の地屋村山のもとそ松原個り海あるは見えうり個きりの流い今之石ゝ人中測村　川原町　家川原町之

右ある原い水迄村之個のうとあるる石あり今之石ゝ人中測村　川原町　家川原町之

つたり迄つ〳〵のあかゝ慎りて里〳〵るる赤之名見ゆくいつゝ

第茶集人麻呂石見の國ゝとへかゝ〳〵付の羇旅の歌と見えて浪華の

三津より虞女塚渡海後江浦と次第之ゝ　甚次之

つるゝのゝゆゝゝ迄ゝてゝゝまぢゝ海ゝ後ゝ〳〵ゝ加古の海ゝ

とゝゝていうゝゝの浦い二見のゝゝゝうゝゝゝ

我心奪ふ月浦の網を絶えぬ心やむとえをとゝ　鎌倉

うちえへてかこみ浦うまひく網の紛れ若ゝ紅せうん　澄雲

加古驛　今の加古印南郡界と跨る所加古川と書できる
ゆえうり上ゝ加古駅と出ゝ書家所ゝつゝてゝり

濃

二見浦　碑ハ浦の海辺ゝあゝ今ゝ二丁の二町ゝ入仲勝ゝ日本ゝ
和歌深雅ゝ多明ゝ浦ゝ二見のゝゝゝゝ　橘広の浦と得てゝうん
但ゝの湯ゝまゝゝゝ二見のゝゝゝゝ

夕月夜はやつゝるゝを玉くしげ二見のうゝはゝけてゝそゝ　東浦

名所　長浦　長浦の二見の浦ゝ海辺ゝ花ゝ
玉くしげ二見の浦の海名あけぐゝゝゝゝゝゝゝ

山浦ゝ海ゝ揃ゝ
ゝ堅ゝ竹奥の

天満宮　西二見ゝあゝ数ゝ松と　補陀山観音寺　上ゝ日あゝ　瑞應寺　東二見ゝあゝ

徳源寺　上ゝ日あゝ　長徳庵　上ゝ日あゝ　伊右河　古宮村ゝ二十二町の間　潮嶋山松元寺　日村ゝあゝ　福星村代神楽

青雲山蓮華寺　本宮村ゝあゝ　伊右河　日村ゝあゝ　砂子大明神　東神村ゝ

大納言藤原房卿古城趾　大内村ゝあゝ　七のゝゝゝゝ
月梅広の手濃紙ゝゝて加古郡ゝ上白川ゝ板東藤原房卿赤松の名ゝ城と稱き白藤の紙ゝゝゝ

加古の渡

加古の松
加古駅
常住寺

別府　赤松園心の祖なり。

[illegible]

聖陵山園長寺　長砂村　境内岩屋あり　寺宝十三佛の画像[illegible]十三軸あり。氏田一平方[illegible]

[illegible]

[illegible]

二見天神

別府
住吉
松い祢本にして幹い猛虎の蹈踞のごく枝葉い所移る仙人
周りい巳十歩
耳ハ二十歩
左さい丈余
実る糯米年ごとに
多べき霊本
社参
瓢水
なを遺く
瓢ハ別府の春ゝて
湖傍瓜畑樹陰酒い
赤刺時ゝ絶後為
今朝の
瓢水

[illegible]る砂尾上い社記よりいろごく今の渓の天神八丁坐の松林より今の尾の入
る砂へもうち直の深林廣えうして翠を波よりうらうの優古の渓こみるしき名不
かうる流よ優古る砂とつひて競うるれい流のる砂お老の名本と一編の細紙と
して恒ふうり紙るふ見古今の序のまゝはたゞ〻古今集序い
ふ〻のそうよせく人とこい松ひ〻ろまる玄とのびる砂ましこの江の松り和老
のゆ〻うよ物わえ

恋いる砂優古ふはふるき松のみ紙りいく久しき物のたゞしよ引又老人のまるどゝ山民
戒よりひの久しきと松のようひの久しきとらべてよよ老ぬるの心とよむが面へよ和老とこの
ゝうよ其松とさに物い万株の林とひいく一株とうんよゝ〻ひうふ雌雄偶せの松と
和老の松と名附い後世の侶り為べ〻人の老て世よ久しきと両面の松るゝ〻ビ泡歌い

誰をうもまた人みせんる砂の松もむ〻〻の友うゝうく　五条の后

まはまてもえ〻くなり返優の江の岸のひめ松ゝくよへぬらん　ふ〻人ちれ

優古のきゝれひめ松人ゝ〻ばいくようゐし〻問ま〻〻拙を　ふ〻人〻ば

るゝごよまう松まう物りて渓よ心ゐ
つゞまぞく易作ゝれい拙て久〻〻ふりぬらふよそ名せゆる松い
新本集

る砂の松よ物くまく立波のえるけ〻きは我ゐるゝうん　後鳥

古禮

山ちい院よいゐ〻とゆやまりうふ仙ゝう高加古海の郡よん会ビ〻

院内の一会よりて
徒樓いる〻

る砂の尾上の磯れ者ひをうたうきうけて雲やをくらん　藤中納言匡房

家い云山ひこの磯とゐ〻くる歌ゐはゐ〻ひる砂い元の歌名うて尾上い山の尾さたるゞとゝ〻う
る尾紀ゐの尾梅の尾ゐゞよゝ志ビ右の歌いる載集おその郡うて夢吟の徒よ。蓋
紫物ゐゐゐ〻ひ考ゝ〻ゐ考ゝ〻ゐ磯ゐ磯ゐ磯

尾上社

たるべしゝ　所ありて浪花より遠ゝる不うり　延喜六年十年の年号地がろよりうんえ
うり　光西番二世惠帝の時ゝて日本寛政九年までいま三百九十九年ゝ後紀
の日本永和元年よりいに百余年ゝ見と以て尾上刀田山の二海もとゝうゝ
百年春の物ゝは見えさうさんぐも百海より佛經と始めて日本へ渡せ〳〵い鈴
明天皇十三年ゝて元る二百年ゝ
孟ゝいゝ入六十年斗後のゝ此ゝ
徴ゝ〳〵造しめゝ紙云ゝも求ゝ
ゝる天王寺六宮堂の塔ゝ
物もゝるべゝ〳〵ゝ
兄婦の耳と弱ゝ

石紅

尾上林の田の中ゝあゝ　俗ゝあまの小紅ゝ
ゝ花ゝまゝ〳〵ゝ

養田祠

岩田村ゝ　祭盗鳥尊　稲田ゝ

今津川

尾上ゝる砂の間ゝ

高砂

ゝる砂荒ゝ小紅ゝ
数ヶ村と御國産ゝ

丑年齒村祠造宮の時ゝい民家ゝ今洲ゝあゝて宮家ゝ

津國

今宮の四例ゝ似ゝ

靖宮

大きき村ゝあゝ
紀伊八幡宮

大川

加古川の下流ゝ
海ゝの

ゝる慶長六年

ゝ尾上高

砂ゝ向ゝ其後宮家ゝ廣ゝて民家ゝ
大度ゝ
易ゝ
今松林を倉庫ゝ
不の舊名と抱ゝ

高砂浦

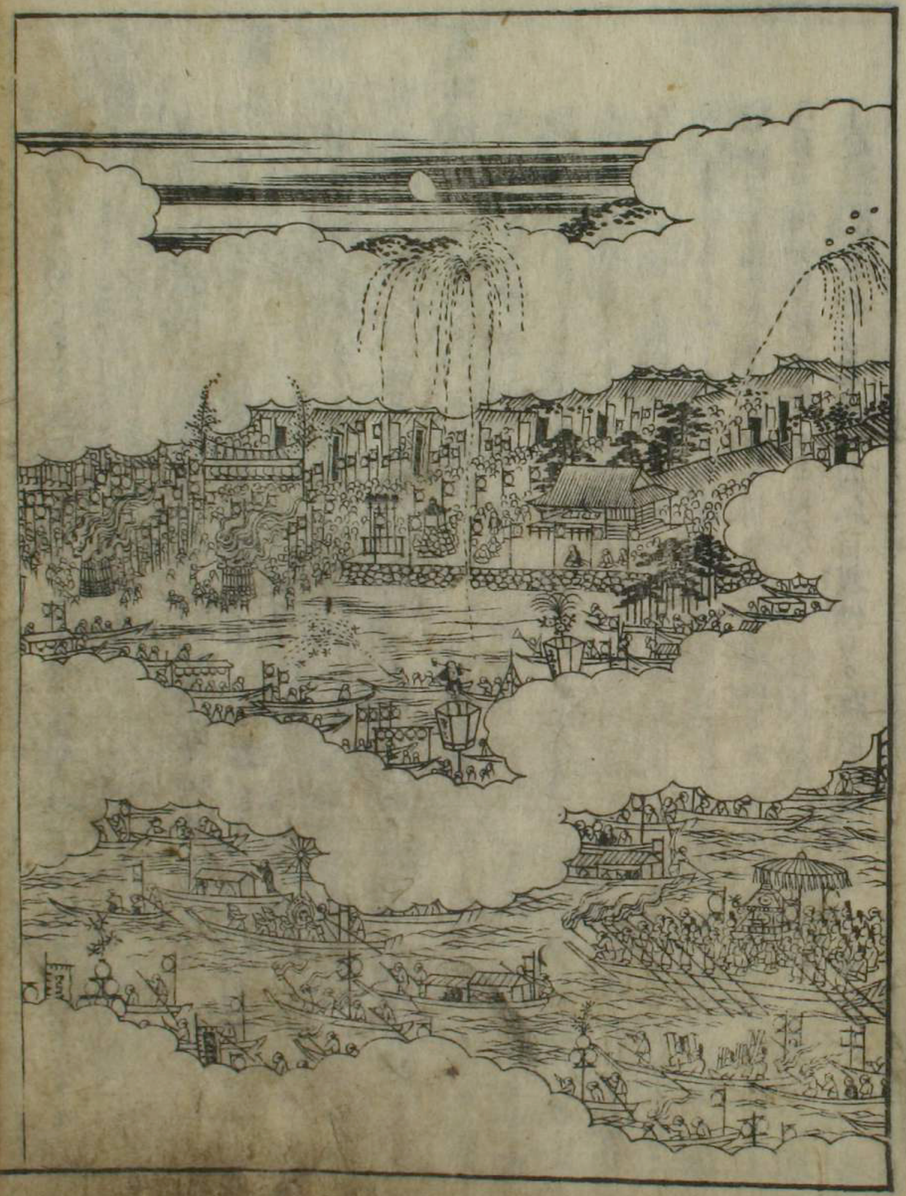
ゝ又ゝゝる今洲の
浦ゝゝ中世の海ゝ

高倉院嚴島御幸の記ゝ
ゝ出ゝ
ゝ
ゝ
かきゝ
ゝ
ゝ

高砂社

高砂祭
例年氏子より奉納の能あり
又ほう法人より人まとを出す是
を国郡法主城龍寺守さう
らん祭礼ほう法人より例年のべ
物のさしづもろ仮人をつくり
○十月八日忌やまりくらして

神輿乃渡御行幸如て
供奉の樂人船も
外敷艇の併紅
彩るの桃灯も
月星の光りと
奪ふ敷半の
旗標ハ水波さ
映ト彩綺布
て寫くし
是迄なの事
敷之時と云
てなん居
ざ〜〜



後撰
物石ふく紅てもゝくいえる浪のうらのこまやかちやあらん　ゝ人ちん

本綿崎　先もゝる砂のうゝをうとゝ
うりつまらゝうゝうゝ
えをゝ　ゝ浦風いゝ小ゝをうゝんゝゝゝゝゝゝゝゝ

荒井　ゝる砂の西よりゝ
小いゝ山里よ加古川のゝ流あり

高砂神社　南流川の南天王の比　祭神素盞嗚尊　稲田姫大己貴命　例祭九月十一日
摂津名所図会　相老の松　の傍あり

高砂城趾　城を据京平三を湯系ゝ山て別石長治よ屬ゝ山ゝる砂のよ谷寺護ゝ
附よ中國毛利輝元三本の別所荷擔ゝ吉川元春小早川隆景と三万余
騎を率ゝる砂より三本とのゝる因所を多ゝ居通路を傍め織田信忠ゝ三万余騎
をゝて三本城と囲む毛利援兵三本よ通ぜゝ後よ山浦よ月日を送るゝくて天
正八年の春三本ゝゝもよ尚城と高ゝゝゝる甚後慶長又年池田少将輝政攻
撃洲三ケ國の大守として山浦据京ゝ城趾を攻ゝ和睦中村豊前守の援に千
人百石侍士百騎を添ゝ同代ゝせり輝政の命ゝして牧村を集めて大坂と造
ゝ心　三十三間　横十五間　其外よ石垣のゝ大坂百城ゝゝる輝政の嫡男武蔵守輝真の代日逝

尼崎寺よ福二方三よ石所縁り山浦の寺護藏ゝらせり羅漢石礎墨しゝ本
戸を十一日よ宝ゝよ其後元和年中本田忠政ゝを破却ゝて尚浦ゝ年沉
天王と造営ありしと

十輪寺　ゝる砂村中の　本尊阿弥陀佛　安阿弥作　浄瑠璃寺　因光大師の画像左方よ十一面
観音右方よ吾孝大師よ徳ゝよ彫ゝ新緑堂よ地蔵ゝる開基弘法大師中興
因光大師之建永二年三月十九日大師　遍歴の舟山浦よ御船を寄ゝ上ゝ渡ゝ
治郎実ゝゝ若ゝる德よ深帰ゝ剃髪ゝ法名ゝ　遍歴の時近郷よ及ぶ因て遍寺
真言宗と改め今の西山光明寺東山浄楽寺よ屬ゝて西山一流の宗檀林小
本寺ゝて大師二十又ケ所の拝第三番之所德流建暦の年大師帰洛の時
又山浦よりせゝ三ゝ善念仏聖昌の地ゝはゝゝり改宗ゝ後浜浦十万上人改宗
小松原洋海寺ゝて大師宝龍の御教ゝゝゝを得て岡山の中緒をゝい事業よ
納むゝよ依て地蔵山の四号と宝龍山ゝ改め実僧門の教よ知恵陽寺峯法
親王御深等之山外寺宝よ長文の勅書の羅漢　長三尺　七宝の珠数　直ゝ迄御忌
の法華ゝ大師遍歴の時の月よりて三月よ魏ゝる
天空月西上人庵室跡　南平町の南よあり　大徳知識ゝて大西道灌の嫡孫ゝ正徳年中
二月廿九日高砂ゝ遷化ゝ尚紀ゝ尚紀ゝ偽の冊まりてゝ遍の紀ゝ跡をゝるせり

十論寺

水を九十六人淵乱石堵築
境内よりの石堵築九十基中央の
宝塔境堵ありる藁佛し祐八
文孫元年孝臣秀吉の親鸞
伝代の御る砂ようめて百人を
石る保陣の御百人の内
九十六人淵乱八より
永世る砂の地るを
御免許みく
ひりみ志うり

大竺徳兵衛ゑまるの内
羅羅國ゑ大伽藍
三百あり釈迦の
立像坐像臥像
大佛と妻貝名
小指ゑ三ツ
長サ八尺堂の壁横
三筋の明あり茅葺
長サ三ツ
ゑ余ゆ
右ゑ
若い須達
長者の
家敵
流へ
と
ゝり

天竺德兵衛宅 ある船にて船頭の名徳兵衛 先ハ慶長十七年丑年出生の者
くく今より右後ろ代
より寛永三寅年十月歳より天竺三渡り延宝八年六十九歳にて利慶
法名を宗心と云
附記 往古日本より唐土外國渡海通商ハ少しにて殊に九州迄より多く渡り商
右図秀吉公の時代なげうり名ゞ市岳代寛永十二年より傳止せられて鎖国入
夷のくに より 昔日本通商の船いとべて九艘之長崎にて来次氏二艘 丹本氏
一艘 薩摩一艘 京屋一艘 泉州堺にて伊勢屋船一艘 京都にて茶屋船一艘
角倉一艘 伏見屋一艘之船中義の造りより似ようとなり 徳を陽に十
又鼠の財より 彼角倉の船乃 水をもらはりて大明南京 多くの名寺大寛の跡
くにに通ひ 所に天竺徳兵衛 はて其国書にてのあり

刀田山鶴林寺聖霊院 坂本村より六七丁 西にあり 天台宗 孝創 人皇三十一代敏達帝十二年
聖徳太子十二歳の御時 佛法興流の地を天竺渡り太子其
考文 白橋州 摩耶山海の中間 廣大の子示あり 毛百代不朽佛
法繁栄の地 とて所 大和國 磐余雙槻宮より約 碧みて遠 用明

帝十二年三月上旬 太子十六歳の御時此地 精舎を建営 秦川
勝に命じて三間に面の梵宮を営 治り釈迦三尊に天王の像内
陳の記 八大金剛童子の彩と図 に 殿 三尊の佛像を画く
東の方 太子の御宮殿あり 内 は 天王の像と図 右の方の財
は 太子二歳 月十六歳 に十二歳三歳合 の 太子像あり 即 太子の御
頂の髪と抜 せ給 太子世 抜 髪の 太 と称 し 太
の造営 創 今 に 二百歳 雲 と称 太 天王 と号 に
に邑 に の 太 天王 と号 に
東 に 西 に 東田 南 池田 中 大野 鳩 号 日本 に 簡 の道場 に 天王寺 と云
る 岳山の四 に 太 十二歳 十六歳 の御時 寺 に 太 殿 に
比山外 に 瞰下 上皇 石清水 八幡宮 の 四 祠 今 あり 加茂社 結社 社
八幡宮 今 福村 佛殿 九間 に 面 南 太 る 薬師如来 の他 日光月光 威 天 毘
沙門天 共 に 運 菩薩の他 十二神将 安阿 弥他 創建 の 太 称 武 義 國 大 日 鼻 人 郡 春
則 一 に 有 余 年 の 星 霜 と 歴 ぬ 度 破 壊 して 天 正 元 年 南 國 三 本

大日堂

刀太山
鶴林寺

協別所長治の再興之　観音堂　正面南向　本尊正観音　長二尺八寸立像　獅子窟　三間四面
二尺五寸立像　三体不動尾上の作と伝ふ　龍沢寺所蔵の形あり　護摩堂　正面　本尊阿弥陀
如来　左右観音勢至　共に恵心の作　日護摩堂　東向　本尊薬師佛　日光月光
十二神将　毘沙門天　大黒天　千手観音　浪華津田氏建営　三層宝塔　東向
本尊大日如来　恵心の作　此塔の坤の方に三面の宝冠カ大石の底部の他石は運搬の後
宝屋あり　各佛像の他とも　二王門　金剛力士　他額に鶴林寺と書して後名
今家荒あり　稲荷祠　山王権現　牛頭天王　十二社　三社神　摂小社
神殿の震殿　三間四面　東向　天満宮　其外南向　摂社霊宝殿

印南郡

印南野　此地今開墾して一面の曠野の中に清水の湧る所多し
又明石郡の西より加古郡の東に流れて三里斗の海に入る　今は新田と
なる　人家も多く開墾後村落を成す　此村落を成すに際して冠らせて唱
元上の播磨の国号の常に用ひしに大石の明石一国は
てを中の神と元より明石は加古印南は大石の明石一国は
入ると又称号集に神亀三年九月元正天皇播磨印南野に行幸の
長歌あり　墨くみ　みもろの山まおもかもを　みもろの紅梶もかし波たくと

義満の厳源清の記　○たりまぢいとぐくつげくも心とまる　ものぞ
いるくれもとくいたるふをしまるれて日方よくまるくあさぢかまとくとりく
ゆりくゆもえいべるもいとけうあり清あるるぐさたるどうちもぐるるよ
いるくれのたのもち神のもるまるあるあ欲のけるくなまいるくしたりまる　赤人
後撰　狩人の暮るる藤いるくれのみたいてのくくてたるまれしけま　よみ人しらず

△池大明神　鎮座元氏神之大池あり　長三丁斗其傍に祠祀　野寺山高園寺　日蓮宗寺村
△石守古城　加納城石寺中村に郎姫城と元亀天正の間の城　八幡宮　神社
長治滅後秀吉の陣に用州の軍に武功をたてまし　詳記に
△天徳山常光寺　寺村　園照山常観寺　宗侶村
△赤松播磨守政村墓　東村加納宮光寺にあり　和歌とりに浦小松国山合戦軍
政村家臣沼田某此所に葬る　室津加茂嶽に居る海賊臣浦上掃部助村宗に滅ぼされる
印南い稲実　素幼天皇の后播磨稲日大郎姫と中臣の郎イナミの月例　そ此国の産之
加古川　此川上井田の辺りそい郎男るしい羅道の傍そい川の東の寺新町陶の口の
辺りと印南郡の入口之ーいい陶口の傍に流れ　川の流せまりたるるど　水流い
丹波国久下村より出く播東を河郡と称て加東郡溝部と三草川と合流
又一流い丹波氷上より出く播小荒田の山中より西服村そ日流るる其下流

東条川三本川なる合〜加古の驛の西にて二流となり一流いなる砂なり一流ハ
荒野なるなりて海に入

えび人の釣うちまうけむとしあぐみてみをつくる加古川の波　みな

佛頂山稱名寺　加古川村にあり　本尊阿弥陀佛　宗　○一鰐山龍泉寺　日村　宗

加古川堰址　加古川村なる八十間ばかりの堰なり　堰なる入口　慈恵大堰なるのなるとあり　異なる用いて書写山に入後を図なるたくいて忠を

泊大明神　雁南の庄　本村あり　縁起一伝　社殿壮観なり　紀伊国日前宮を石明神の御

年才天社　中脇村あり三方に川あり　海中に　緑樹森々として山色青々たり

本村堰伝　石輝城と云本村にあり　城主ハ雁南右馬門尼郎　勇永和元年赤松に敗後を男長男
雁南刑部左郎長宗徳三年家督を継ぐ本村源に郎と云又武功あり重忠
元年又討死の後尚石輝の城を守る長孫三年三月初日山名宗全ひ小討死後に落城
て絶えりの村中に撃王山金剛寺あり　加古川東の岸　本尊聖観音　開基聖徳太子

大津山福田寺　福田村あり

蓄い稲荷ふ〜ぶし後に大津山今大義ふらひて又村名稲荷村と云又大
津に新村〜云古名あり　本尊加古川の湊の辺に赤松宗心元弘の法法華堂
宗の石塔残る天正の乱に焼て石塔のみ残る文孫寺中曹洞宗

流むかき石塔に印南郡河南庄大津稲屋山と見えり

来田村　加古川の西にあり　昔い米俗に書〜は法花山の縁起に有て法道仙人妖術の
なる〜なるべし　尚法華山の縁起に見べし

八十石階　加古川より七八町　川に沿田村あり　○羅山神社考曰播磨国風土記に八十岩橋は陰陽
二神及び八十二神の源流なり　丹波播磨若き接あり　云小河の義田　拾遺

此岩橋は山の麓東より西南に向むかひ登ること二丁余にして一山一石
をのづから浄瑠璃として巻うる石階あり　高さ八十のいはしなる近辺の
名なし　神本幣の庄天ゲ原神　吉の星名と神吉の名所
見えふれ耳に聞不神縁流〜びに石臼に踊りて回顧とろふ滝音
流い辰巳なるに〜蓬瀛とひとしく摩耶山の秋月高御座の暗
荒に心の塵をも吹さらひる砂の遠帆尾上の松原に見る人のたま
ぬと消をぞ〜漁火りは火の点う〜放たりしどもい眼乳のみぐるふ
ま見えて〜播磨素の巨魁うべ　右振信無社殿門氏　八条の人の主と称
雪ふるほあさ丸拾衣白之見さうる八十の岩さ〜　本文拾之砂細

八十海原　出雲郡の内なり小流なり加古川の上流なり
通称雲石の通いなる所あり
慈乳山佐伯寺跡　開基慈眼大師　此寺の縁天正の乱に集り今三本郷久留美慈眼寺号延慶二年正月廿七日寂む
△石屋　井田の小池尾村にあり　戸口一間半なるさ五尺ばかり内に地蔵を彫くり三間半
（俗云ふ湯彫田の大池の郷）
みて横三間奥へ広間なるさ一間半に廣くなりて左右天井とも皆石にて整
うり先上に云ふ石の墓所なり入てこれを見るべし　俗に兎が窟と云
腰掛岩　岩屋のゆえあり腰掛とくるゑ様とくへの人来あり　鞍馬寺跡　米谷の夜天ヶ原より北丁ゆのしよりの長さ
石形ちり先もとくへの人来あり　十尺間横十間の広あり
毘沙門岩　天ヶ原ゆのうへ上あり自然石の面に　米谷村　米谷村にあり今常楽寺と合寺と連り十年ばかり来住
毘沙門不動を彫刻せり　別不長法の一族民部大夫法居城一万石余天正十年ばかり
（城主の石屏と連る吊女なる別不長法の一族民部大夫法居城一万石余天正十年ばかり）
米谷井　米谷村の西路傍にあり法体水　石井清水　中西村にあり石井と号けしい方三尺ばかり
米谷村にあり清水にて人用の器あり　石丸一尺三寸ばかりの穴と穿ち井の上に置り
方に石井とも人法あいを郷の名物にて清水とくに流るゆ　至夏と捨て若後物来のあ流し
道満法師屋敷跡　海原村の米谷村の小池丁ゆ岸村に　河海物に道満法師摩訶羅国に居る
（あり今民屋と成る）
妙見大明神　細流に苦い国くに法陽師摩訶と墓を入る云　佐用郡にも石湯塚あり
（例祭九月十三日）
米谷村　摩訶羅国風土記に曰出雲国阿蓋大神大和国畝火香山耳梨の三山
相闘と成てこれを法止めんとて摩訶を来りしに国和止ひと成て平国へ帰り
で其来不り紅と覆せて摩訶止る故に米谷の飛霞と号る云米谷即云米集之

かぐやまと耳梨とあひ対うて見るとし印南国なり
昔いまの所なりあり山に三山お然ひろしこれかくれ雄山畝火耳梨の雄とえけ三つのらぐ
かぐやとけきりして今のく得て来ることせんとけつてたいてゆるとようきうろう
生石明神鳥居　米谷村路傍にあり　一道神光の古揚
これ石窟殿一のる母と称し　八幡宮
又拝の塔あり　華表維石　頭然高岌　確乎不磨　千古雙之
石寶殿　鞍嶽室と稱し　山腰にあり　石殿を立て神祇と云大さ二丈三尺に
方高さ二丈六尺とべて社擅の形に似りうと撰の側しうえ石の屋根い
古墓しも撰の尺人て拝をる人い家殿の屋の面に一石を立て似りに分る
ゑ元より山地い近国の名物龍山石の産ぞるゆて家殿り一間又十
余丈の石山の中を切拝即ち切拝うる石にて造り其石に側し捨う
さまを古墓と屋根との同いに方くゆ切りけて拝くとに成りくるなふな
自ら古墓にて松を生ずに間の水の湧りくるい毛拝て空きりしばかり
（参徳天皇白雉年中の石の英の社祇を縁て拝法を法を蔵きに赤松別石を動乱の題慶
てかりに生石明神る後明神二神と称帝殿の法屋とろのくうり神徳寺に記録不恩議神人の霊地とく
るものの上ゆぐりて来の器に〇社社のお建い今石濃の国赤坂の若妻楽寺のあるとろ）

石の宝殿

○武蔵石宮の制他に抜ひて異なるもの也 今は工傭ぞよかるべしんとはいふ他
にも要うべし 只横の側に九つの穴あり考ふるに義考ふるべし
○筑後国上妻郡人形が原にあり石の人形あるゆえ人は後世名付て石人
の像と石厨三間の物あり云い先輩が窟に似たり又神武と妻の名も加さう
○又一説に生石の名山不の石山に付ての事なり 所に山宮いを石の神と祠ろの
心なり生石の子の地名なり 所多系のまた石村をもとの山不の産の人なるべ
し 神窟とあるは此地の奥に考ふる石室なり 若や先係計天皇の
御一名武生石なるもやせい此なるべし かくまし 又紀
州三穂の石室の歌に付て伊勢字治人考に石見国人云其国邑智郡宮村
に大なる石室あり 古老お伝へて大海人なる石表名の二神の住給へりすて即神
石室と 古名とあり 先渡田より二十里計遠鄙之いづまう先なるべ 尚考へ
龍山石 石の宮殿の遠り皆此石壁なり 石柳溝渡の
恒に尾と細長く切禁の小川より海に
なりとなり 禁の坂市村に石工あり
龍が淵とひて龍沢に似る岩あり 所に龍とらえ即古への海渡なり
石舟 石宮殿のふの後の西の岩に
あり長九尺斗横巾尺五寸
かくの形して中凹く開うり先
古代の石鄙の蓋なるべし

阿弥陀宿村 駅名にあり東西三村家数百余元の宿
ひしと此名なる故ひかい浦光寺の第くるべし
道満牛戸 此名村東一丁斗にあり 清水と旱天に涸るる
る新田の泥粉くれ先乃満所ひのあるとなり
祇臺 牛戸の東一丁斗にあり 此面に高さ七尺斗 細のあるとなり
大石に切出せり先古一の遺構とあり即此辺若狭国の寺の護国院十九院の遺地とて
白矢薬師 中部村の東地尾村にあり 海に東系遺寺とて人若此地に泥家酒出て
遍照山時光寺 係係在西阿弥陀村 白矢の武澤とあり
あり海に宗西に流 人皇八十七代後堀院勅願石にて本尊
阿弥陀如来開基時光上人の上人俗姓は多田満仲九代の孫源教頼綱
なり天福元年三月十八日武庫門の遠り津樽寺西山上人の弟子となり
時光坊と号け潔高徳なりしかり感徳の阿弥陀を初りて建長元年
曾根の社の西に精舎を建て後文永十年六月十八日今の時光寺に移
し尚旅客結縁のあるべく小系を阿弥陀宿と改む近村の時光寺を
時光谷と名あり曾根天神の寺の法寺と成 庭内正月の松
飾葉して今に生ずる
岩尾山大日寺 西ノ宮の名にあり 本尊大日如来真言宗むしの国分寺の末流と共史に

遍照山
時光寺

開山まハ上人の
本像ハ
大勢の
阿弥陀の
みきつ
色観記
妻し
笑ス
器
況

たりて後再建の時先寺の東にあり比叡寺荒廃の時の事なり別所長治の幕下
陰山左近寓居せしとぞ見えたり大日山の構えなり

五輪塔　年号暦應元年三月之外に記なき刻字明らかなる所なるの二基あり又人
うち若狭兵部後寺能長の墓なるべし建武三年比地に自害の事なり記し人
あり尚下の六騎武者の条に元亨元年

六騎武者塚　豆腐村の西狭谷の傍に延元元年足利尊氏九州より東上せし
あり星霜嗟咤堪へ
附服屋義助播磨へ引き退しの児後後寺能長の息三郎高徳三石の
南の山路を夜もすがら馳てさしの浦へ出脇屋殿の退付んとせし高
徳さんの軍の疲れと驚いたるが因なくく知らずして忽ちに捕知らず僧の死
妻濱辺を打過ると赤松が兵治成遠り名れば討破り那波より阿弥
陀が宮を過ぎ十八度戦ひを侵し六騎を討ち過ぎ過堂に入り自害しぬ
赤松が勢の大勢の孫左衛門治郎重氏ら人者葬礼して送骨を故
郷へ送りしなり平記みなみ人播磨記み後三郎高徳の墓云
を誤りなり

六騎武者の塚

佛心寺　羅石より一丁半南小松村　山寺八幡宮境内に有る五輪塔あり滿仲の石塔
塔よりひだりの延享元年山五輪の北又同東の田石の左手より石塔を
掘出し其右手に苔より佛心寺の法号をほりて正月幸の記年は俵脇
などせしに有り

石塔高さ二尺半長さ巾二尺半蓋の上に五あり又一尺巾方高さ一尺半石の紋
蓋に印彫蓋なり小細砂にて拭骨折無しなるさ又寸半の小瓶あり中に
骨きせの骨なる様に似たる物あり瓶の外廣つまりて狹くなる小さなる
一村の牛義く記なるあり先山岩ぶりと恐き又四のごとく狹くなる

安養寺　編居村　要事　刎原寺　佐古村浄土宗無量寿山安養寺文亀二年文賀法仲開山

伊保湾　荒井の西にて今奥浦と云人昔は伊保の湊
新撰案　ふるき歌に藤さめて きけいたりまがさいかの湊にあるらく　大江嘉言
加茂明神社　日本加茂にあり昔は村中にありて弘安元寅年中
正嘉町　右納云寛達郷の内にあり日蓮年の歌に山と掘れ

法さんしちれ社もなるやみまきてを知やり神をあんぐ

飛鉢塚　右中ごろの西にあり法華山の開祖法道仙人　高座石　仙人ここに座して鉢中の米飯をくらいしとぞ
山塚のことく御と西に変元寅歌を見べし
須堂　奥浦村に石佛の彫りて法あり先に附先上人功績の者
家うてあるべと細に引あげ〜しに人附先るの掘記付てあり
掘の井　一名不城不塚のあるに奥浦の赤る法村成の社　滿の井　奥浦村にあり万とも成家の汲む
のうさうにあり蔵の遺跡なりしてに附潤とぞ
曽根天満宮　多根村　祭神菅公の霊　元天徳四年右孫田美命
山里の氏神として例祭九月十四日

延喜元年菅公筑紫へ謫遷の附所とぞ山伊保の湊へ着せ給ひ社
より一丁半西海岸の岡に上方の絶勝眺望の地なり山宮と称し天神
と称し奉る天正年豊臣秀吉右の再宮しなり　摂門の歌の奥浦湊
境内摂社多い岡と記し年宮に天徳四命を祀り菅家の廻
神うと成り

菅原道真公三参議是善卿三の子十一歳にして詩を綴れ

月耀如晴雪　梅花似照星　可憐金殿裏　庭上玉房馨
真紀中文章生を奉らるく下野掘を拾く及第して玄蕃允となる内
記に移り弾正弼帝位即位ひ記り　萬機の政を
秘〜む正三位に叙〜中宮亮と兼る貞観元年内覧の宣旨を蒙りて右大

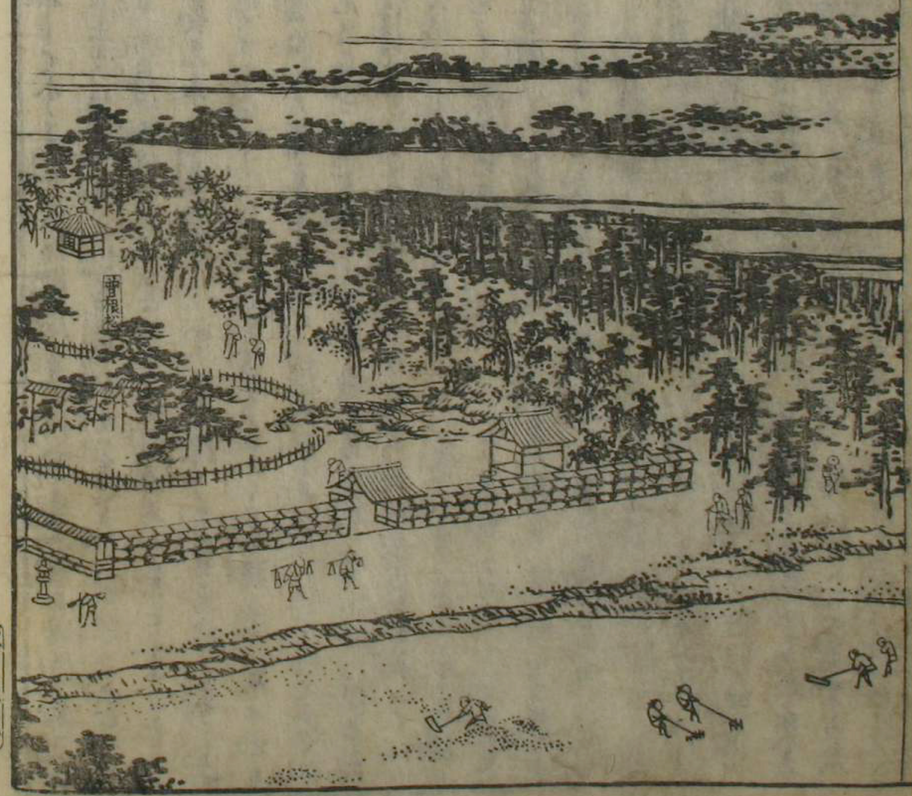
居を拝せらるる山門表を上て堂を建てこれを德道と三年園句くみんを以道真
園く建て爰に且奏曰只今呂と呂とたるを門人忍これと賜むべと
て春日柳眼中の詩を織て献どこ是て帝法皇各御衣と揚て
て孫をて尚門家の堂の奏のよりて時平少をこれを嫉むもて園句の認を
を以て孫心を妬び時の源光い帝の罵をを奏園も多仮の乎あるく
もの道真ゆ下の居るを賜せば奏原蒼根も人道真と嫉む心あり
初て時平光の奏と結び光と道真と編て敵の森時平私の奏
して曰道真ゆ女い孫世親王の嫁とるゆ成の滞中紙屋して孫世親王と立て
園句を乱せんとの心あり と後云に帝い仮の交りの渉れい逆をこれを感い
給ひ延喜元年正月を宰相帥の賜せらる道真光と夢ふ人ゆ自明句ろ
ゆ解ゆ和歌を以て哀と法皇の所ゆ法皇驚る世給ひて光と脱んと云に
ゆ光言蒼根道真人其ゆ道真の子男女二十三人皆黙けて逆
異あに賜せらる唯小男小女の道真の法ゆ道真光樹の梅ゆ邸と愛ろ
ゆ偏んで花と開ゆ園句と和歌と詠に、赤風ふうばゆ物せよ梅の花あ
る〜〜〜〜〜〜〜〜園句甚胴む脱ゆ転ゆて中明石の澤長ゆ
あくまうしと嘱まるて〜を宰府ゆ流ゆ園く門を閉て出給ひ三年二月
逆ゆを宰府ゆ薨び薩摩ゆ安楽寺ゆ葬る年ゆ十九三代実録ゆ十巻と倭に
不居て偏居に在ゆを名と園句類聚国史二百巻ゆ彰撰菅原集法明物

菅影日記ゆの書と撰て今ゆ後興福寺の僧定達入唐の時道真及び
長谷雄橘廣相都良香の詩集を小野通風紀望を以て彼地ゆ奏む道真
薨〜て七年後ゆ時平菅根相続て流に其時弟師教ゆ光を崇ゆ方ゆを
に帝後ゆ注と嘱て延長元年平寛ゆ後〜正二位と称う大富天神と号〜て
左遷の宣旨吸道真のゆを記せ〜外記の書物ゆ悪〜奏捨ゆう左ゆ世々
其詳ゆ知ゆ者に天暦元年右近馬場ゆ社と建てこれと祀ゆ中の
社と号に正暦に年左大臣正二位と称う易て太政大臣と称ゆ又正一位左大臣
菅原朝臣と称らる八月に日ゆ建ゆて忌ゆ祀と設け後創こに諸国恭敬して社を
建ゆ所い画像と祀ゆ天満天神と称〜ゆ二十二社の数ゆ入て〜寛弘元年紀て
小祢社ゆ幣帛ゆ奉ゆ光ゆ歴朝の奉幣ゆ絶 又渡殿とゆ称ゆ
在祠らゆ在祠のゆ蒲正光ゆ秀世く其業と継ゆ寛弘ゆ年間奏と
年八十ゆ羅紫妻楽寺ゆ葬ゆ年ゆ十九三代実録ゆ十巻と倭に
〜て名けて東塔ら人僧叡と長きて寺務法規三巻と撰ひて寺庫ゆ秀
む後人ゆ人の祠と道真社の側ゆ建てゆ神廟と称に光ゆ正三位と称ゆ
附記 或曰ゆ世ゆ雷神と称に薨後内裏ゆ雷落て法性坊の所ゆ焼と
称ゆ光紀孤史ゆ見ゆ〜〜〜〜〜〜〜〜内裏ゆ雷落ゆ延喜八年
ゆ菅ゆ薨て後十六年ゆ帝の遺言と信〜給ひ〜〜〜この不幸ゆ
に光帝の在事之生記ゆ命之災害不幸ゆ世の少之所表ゆ為ち給ひ〜〜

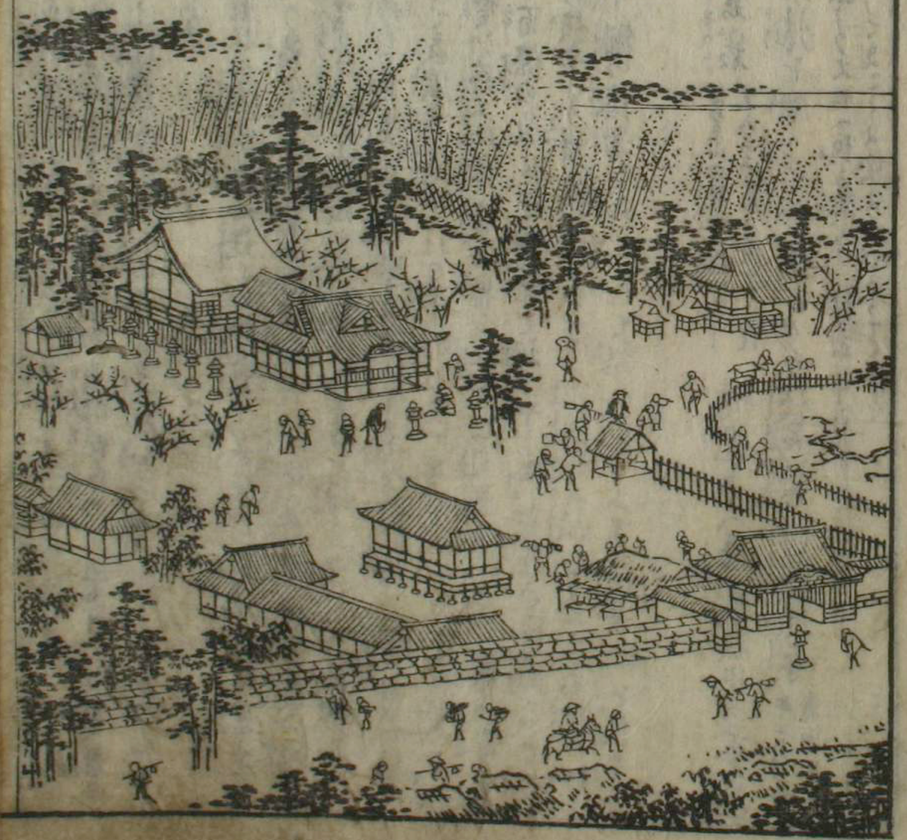
曽根
天神

曽根の松

神殿の巽にあり
菅公恩想の廟
松の南と桜て我と
栽ゑ給ふ家へよし祈
給へよ既に枯死
小し繁昌の形あり
枝乾かんとする時
三日天衆歎地と鳴る
おそれ南の流れ東
西へ直り株のさきと
長さ八尺ばかり
良の方へ伸の間



二十間斗乾より巽の
方十二間余其餘は上方
へ寄れて偃蓋の如く
又風雪の為ふ折損
るのを恐まして枝く拔
きて代へ百とん
て蓋へ礫く釘附の
如く
翠編青くして
神の靈本
うるべし
備武道奉拔まて
鷲塚社



なんぞかしこくも帝を聽奉りて戒めの詔を蒙らせ給ひて実に驚嘆と
為して人々其者せちもんとゝろいは是匹夫下劣の悪疾臨病の如く本末として狂愛者の
肝腑に出るなるあり沈雷鳴るなれて冠玄のごとくせば都てこれ物ぐるとなげけんこと
いと恐るべきなりけり
○時平の関白基経の長子之年少して心猛く幸と祝て甚強剛通真なれと憲忠
物よりて為人麻あり為人麻いの人也が皆やむ事なく冠進席ありて正二位に叙せ
也三十九にて薨沈菅丞相より六年後之正一位を政大臣と為る和歌とうしゆ〳〵く
学文を好く延喜の時の三代実録と撰ばしいつくも是今く猶歩の力の成いつゝを
み時の風俗甚大者にて衣服華麗之れい帝制と為て禁ぶ〳〵ら其禁と犯
沈者多し帝是と憂ひ給へ御子孝帝と密に語りて自鏡衣と為て帝の側に居
う帝伴て大内裏百像の長として圖書と称るやと御けゝきあり御孝答し
まざと源自と屏け侍歩より帰て門と閉る是より風俗紀の沈むる成之是正み仰く
正御之ひうしひえより側の侍者と凡身として邪正と弊ふ不皆其御と倩ろう
仰て甚野鄙之

蓮教寺　牛岩村之内牛岩山と云　墨岩　日笠山の麓より打へ出る　時光上人浄戒陵望の所之云
墨色つゝ高く尤名し
つゝ石面十三佛の像と彫りて物ふるくとう沈苔祠の○圓通寺　牛岩村あり　奥通山と号
檜笠山　是岩の上にて高根より大塔へ越る岩の名なり絶壁湧あり　絶壁八十の異称之御ふけるゞ〳〵

日本紀推古十一年正月岳広望之樓摩之初ろ府候妻舎人姫王奉石
之艶沈仍て赤石檜笠園ろとる蓉るとゝ人〳〵此不ろろや

檜笠瀬　石根より大塔へ出る瀬
まそとらへ檜笠ふのと

大塔　檜笠瀬の北麓あり一名塔湯村ともいへり　村中に寺三ケ寺天神河あり

東西二里許の間塔湯ろく竈屋ろ数いに百軒ばかり赤穂彩湯
ふも勝ろ

小鯛ひくいつくみけ縄ろうろうきまとあり　塔湯の浦　西の方

的形　大塔村の西の村之内に垂十丁計　村中に神河三基寺院三ケ　英賀日記云宝徳年中山田不懐山討手下
向ろ河郎ふの諸士と称る諸集ろ印南郡之的と為て軍馬の先覚と
名軍御弓馬を御むけ不を的形と号沈後之寛徳元年三月又月手者
神ろして名家造ろ沈之云
まとらゝ之のゝもやゝ拙之向いろ的形いろ
的ろの湊のうだを名滅ろそばつまりふそゝ〳〵之近ろも

檜笠山

棒ちゐる的ゝゑ濱洲のひろひ
拾ふ玉是富伊勢國的形の歌ゝまとゝ結浦の時浦のまそゝゝ
ゝは考ゝ浦ゝちて人の通ゆゝるゝ玉ゝ浦ゝの子て浦ゝ玉ゝ結て
ゝ石とゝゝ今伊勢六形の形ゝ三濱ゝの濱是ゝゝ神中歩ゝ
伊勢の海ちまのまてゝこゝまゝゝゝゝゝ
奥嶽松の浦ゝあまの捨やくゝそ濱下の浦ゝ濱下のゝゝゝ
まくゝゝゝ浦ゝゝ濱ゝ子のゝゝゝゝゝ

八家
地蔵

イコヽろひく様ゝ附ゝ[illegible]石塔婆の古中ゝはゞゝる地ゝ江州月川山
州西山三法寺ゝゝゝ

高御位

山上ゴ石ヲ見し一の門二
の門地ん九ゴと曲彩巌く
うして之古神廟の遺流
鎧ふるくもいろ沢山し
城法の名乃ゆ[illegible]
神幸一夜の君星武
此に鞭参し奥谷の
板垣ゴと城とゆり
うちさき
[illegible]ダトノフ死ダトノフ
踊で城とろトノフ。と
人皆大ゴ小告て[illegible]

高御座山 [illegible]方浦安の二郷より見る石宮殿あり[illegible]の一座高座明神の坐しゝ

例祭九月十九日神輿一基山上より[illegible]ばかりくせ石まで

見と林麓より迎へ高座山と宮殿とのあひだ神幸の鉞舎より出る[illegible]

輿と共に雙べ据ゑまつる[illegible]一夜ゝて山と高御座と号ゐ神座の

俗之里俗の伝へ山上より石屑多きい宮殿制地の時宮より送り来りし

ものゝ[illegible]は人ゝも石屑いろ〳〵宮殿[illegible]人今に捨ておきまゝ[illegible]ぬ

其上若いせ[illegible]の山下波濤の滿し[illegible]ものを嫌ひ神[illegible]べ[illegible]

大曾村 英賀記に永享十二月結城合戦の時赤松[illegible]当家要海の[illegible]

実の上洛と防ぐ[illegible]附兵粮の[illegible]当郡志方の庄内にて大曾

を立て[illegible]依て号く

鷹巣山 高座の西の[illegible]ぎにて岩壁人の通ふ[illegible]峯の松ゞ枝を垂

とむらひ[illegible]毎年[illegible]國[illegible]偶[illegible]

唐ゞ瀧村 鷹巣の[illegible]の中[illegible]名

[illegible]の地[illegible]の東洋 志吹洞 志吹村[illegible]石[illegible]神[illegible]

白山[illegible]

附録

加西郡

法華山一乗寺妙行院 昔は境内[illegible]の右壁西の川より三丁西に[illegible]あり三方道場[illegible]

傳曰開基法道仙人なり法道の霊鷲山仙花五百持明仙の其一之

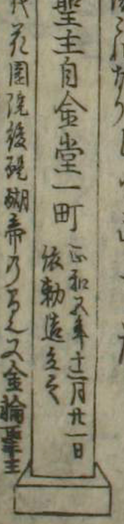
壽命[illegible]年[illegible]十方世界[illegible]

[illegible]手大悲の洞像[illegible]

[illegible]稱し海中[illegible]

宮の西南の石上[illegible]

○車停石標 石階の



武[illegible]車停[illegible]久[illegible]正和[illegible]九十[illegible]代[illegible]園[illegible]後[illegible]帝[illegible]金輪聖主

[illegible]奥院の廟[illegible]

○紗帽 [illegible]寺[illegible]元亨三年六月二十三日一宿

○巖桂樹 本堂の[illegible]方[illegible]小園の[illegible]

○岩英 [illegible]山の[illegible]物飯[illegible]のあり

寺傳曰大化元年秋[illegible]師[illegible]

孝徳天皇白雉元年
並創開基法道仙人
西國二十六番の札所
本尊釈迦善逝一丈八寸
黄金佛天竺将来
脇士毘沙門不動
脇檀之三十三所画像毘沙
門堂恵心の筆 三層塔
大日如来 常行堂阿弥
陀 九層石塔婆魔の像
二なり 開山乃御教書内
輪蔵 奥院法道仙人の廟 法華
巌屋の内にあり
獨涌の石像あり

法華山
宝庫什物
釈迦の像 天竺の佛舎利
寳錍法道持来
塔中 六院 明王院の弘法
大師御作なる大威徳
明王

法道
龍神の
奇事

四十七

又法道かの神を祀せて其来を乞ふ爰ふこれい御厨の祝祖〔　〕
私ふ祭ひ〔　〕ひ〔　〕ひ〔　〕